
花畑にて、

らせ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花畑にて、

【コード】

N5374G

【作者名】

らせ

【あらすじ】

花の妖怪風見幽香と月の賢者八意永琳のなんとなくバトル小説です。

今日も日傘をさした彼女が花畑を歩く。向日葵は彼女が太陽のように顔を向け、それを見て彼女はニコリと笑う。とても美しい彼女の無防備な笑みは本当に太陽のようだった。

「そのあなたも花見かしら？」

こちらを向いて無防備な笑みから何かを含んだような笑みになる。

「あら、バレていたかしら。」

「貴女みたいに力のある者はすぐに分かるもの。」

「失礼、私の名前は八意永琳。あなたは？」

「私は風見幽香よ。どうしてここへ？」

「すぐその鈴蘭畑で人形に毒をもらって立ち寄っただけよ。ここを荒らすつもりは無いわ。」

「そう、なら好きにするといいわ。強い者は好きだから。」

そう言う幽香は何処かへ歩いていった。私は周りを見渡す。辺り一面は目が眩む程の黄色である。

バシッ…

「へえ、やっぱり強いのね。」

「知ってるかしら、黄と黒は警戒色だって事。向日葵が黄色なら黒は貴女つてところね。」

幽香は背後から愛用の日傘で永琳を討とうとしていた。

「初めから貴女の黒には気付いてたわ。」

「貴女、面白いわね。」

幽香はニヤリと笑うと傘を引き抜くのと同時に開きくると回転させる。それと同調して傘からは無数の弾幕が放たれ始めた。永琳も放たれた弾幕を消す為に弾を的確に放つ。

どれぐらい戦っていただろう。二人はボロボロになり、日は西に傾

き空は橙色になり始めた頃、ついに決着がついた。

「これでお仕舞いよ！」

永琳が手元にスペルを出現させ、

「秘術「天文密葬法」！」

幽香を弾幕で捕らえると使い魔を出して囲む。大弾を放つと使い魔は反応して多くの弾を放つ。

「小癩な！」

幽香は傘を開くと先端から凄まじい光が永琳目掛けて放出された。

「はあ、私の負けね。」

「貴女、やっぱり面白かったわ。」

ニコリと笑いながらボロボロな傘を回す。

「凶暴そうに見えて優しい所はあるみたいね。」

「なにがよ？」

「だって、花に全く弾が当たらないようにしているんだもの。」

「え……」

幽香は赤面しだし、耳まで真っ赤になり始めた。たしかに、辺りは幽香のお陰で昼と全く変わらない姿をしていた。妖精はかなり被害にあったが、

「そんな貴女に勝つなんてのも嫌だし、今度また遊ぶ時は何も無い所でもう少し本気を出して遊びましょ？」

「べ、別にいつだって相手してあげるわよ。」

「ふふ、そんな妖怪さんにはいいものをあげるわ。」

永琳は薬箱から薬を取り出して幽香に渡す。

「何よ？」

「花は傷つかなくても貴女は傷だらけだもの、特製の傷薬よ。」

「ふん、とりあえず貰ってあげるわ。」

「それじゃあさようなら妖怪さん。」

永琳はスタスタと竹林の方へ帰っていった。

「はあ、なんだかこっちが負けた気分よ。」

幽香は永琳が消えたのを確認してからもらった薬を早速使いはじめた。

(後書き)

最後まで読んでくださりありがとうございます。

何故かツンデレゆうかりん：何でだろ？（え

もっと臨場感あふれる作品を書いていきたいです。

感想や意見などあったらどうぞ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5374g/>

花畑にて、

2010年10月22日00時06分発行